

近代日中学術用語の生成の展望

蘇 小 楠
(大連外国語大学)

キーワード

学術用語 洋学 蘭学

要旨

近年、日中近代語交渉に関する研究が盛んにされているものの、学術用語の生成についてまだ言及する余地がある。本稿では日中両国における近代訳語の発生及び相互の影響関係という日中語彙交渉の過程の時代区分をもとに、日中語彙交流史の見地から先行研究の問題点及び本研究で扱う範囲、位置づけを明らかにした。

1. はじめに

日中両国語は漢字を共有し、その交流は千年以上の歴史を持つ。両国の交流の歴史は『後漢書』に奴国からの使節が後漢の皇帝から金印を授かったと記述される一世紀にまで遡る。その後、漢語は漢籍・仏典・漢訳洋学書の伝来或いは中国由来の品物の将来及び人的交流を通して、日本に流入し、明治までには日本語語彙の約4割を占めるようになった¹。近代漢語の隆盛は言うまでもなく、西洋文明の伝来に起因しており、それは新たにもたらされた概念を表す訳語を要求した。その中核となる部分は、ほぼ人文科学から自然科学までの各分野に跨る学術用語であり、それは両国語の近代語彙の基盤をなしている。日中両国の近代語彙の成立において、新たな外来文化の吸収による新漢語について考える際には洋学伝来及びそれによる洋書の刊行、使用、流布状況を明らかにする必要性が生じる。現にこの問題に関しては、歴史、科学史、国語史などさまざまな分野からアプローチされており、特に日中文化交流史、日中語彙交流史の立場から両国における訳語、術語の成立段階、時代区分及び取り扱う資料群の整備などの問題点が多くの研究によって明らかにされつつある²。

日中語彙交流史分野では日中両国における近代訳語の発生及び相互の影響関係という日中語彙交渉の過程について、主に①初期洋学（明末清初カトリック系洋学）、②吉利支丹学・蘭学、

③後期洋学（清中後期プロテスタント系洋学）、④明治英学、⑤日本書翻訳（日清戦争後）の五つの時代に区分される。本稿ではこの時代区分をもとに、日中語彙交流史の見地から先行研究の問題点及び本研究で扱う範囲、位置づけを述べることにする。

2. 明末洋学の伝来

中国における洋学の系統は一般に明末清初のカトリック系宣教師イエズス会士の大陸進出と清中後期のプロテスタント系宣教師の布教活動に二分され、それぞれを初期洋学と後期洋学と呼ぶ。

初期洋学の時代は、1582年中国開教の祖利瑪竇（Matthaeus Ricci）の広東上陸に始まり、雍正帝による布教禁止（1723）までの100年余りを指す。この時期において、イエズス会士は布教活動の傍ら、中国の士大夫徐光啓、李之藻、王徴などの協力を得て、数多く（約420点）の翻訳著書を誕生させた。内容からすると宗教関係のものが主流であるが、地理・暦学・天文・数学・物理学・古典化学などの書物も含まれている。こうした漢訳洋書のうち、実際に刊行され、流布したものは多くない。その中の科学を中心とした著書は、李之藻の『天学初函』に収録され、後に乾隆期に編纂された『四庫全書』にも継承され、信者を中心に広く読まれた。『四庫全書』に収録されている著書は『職方外紀』、『坤輿図説』、『奇器図説』、『泰西水法』、『乾坤体義』、『表度説』、『簡平儀説』、『天問略』、『幾何原本』などが挙げられ、語彙研究ではよく取り上げられる資料である。やがて十七世紀後半になると、西洋人主導となる漢訳洋書に対し、西洋文明の影響を受け、中国人によって独自に編集された著述が登場した。方以智の『物理小識』、梅文鼎の『曆算全書』、遊子六の『天経或問』はその代表的なものである。これらの著書は中国の伝統科学の延長線に位置するものであるが、その中で西洋知識を断片的に紹介している。漢訳洋書と同様、中国のみならず、日本でもかなり愛読されたことから当時の語彙状況を知るためには無視できない存在である。しかし、先行研究ではこれらについての言及が少なく³、これからの研究を待つところである。

訳語の面からこの時期の特徴を見れば、「地球、赤道、顕微鏡、望遠鏡、天体、熱帯、対数、幾何」などの天文、地理、数学分野の学術用語が発達しており、その多くは蘭学著書に取り入れられ、今日にまで至る。

3. キリシタン学の興起及び蘭学時代の到来

日本では利瑪竇の来朝より早く1549年、フランシスコ・ザビエルが来日し、それを皮切りに、

1639年第五次鎖国令による全面鎖国まで西洋宣教師はイエズス会士を中心に布教活動を続けた。当時の日本には利瑪竇のような中心的人物が存在しておらず、初期洋学に比べて極めて貧弱なものと言わざるを得ない⁴。挙げるとするならば、天文書の沢野忠庵『乾坤弁説』（1650）や航海術を扱った池田好運『元和航海記』（1618）などが代表的なものであるが、いずれも漢訳洋書の系統に属している。言語面から見るこの時期の画期的なできごと是对訳辞書の編集である。『羅葡日対訳辞書』（1595）、『日葡辞書』（1603～04）、『羅西日辞書』（1632）のような対訳辞書の刊行は日本語学史上特筆すべき事で、当時の日本語を知るためにはきわめて重要且つ有効な情報源である。しかしながら、これらの辞書に収録された訳語には西洋新概念を表すものが少なく、しかも死語になるものが大半であるためか、訳語研究の分野では等閑に付される傾向がある。

初期洋学の洗礼を浴び、吉利支丹学の啓蒙を経て、蘭学の時代が到来する。寛永鎖国令により日本の門戸は閉じられ、外国との接触はオランダと中国に限られ、その場所も長崎に限定されていた。そのため、オランダ語と中国語に堪能な人材が要求され、長崎ではオランダ通詞が誕生した。彼らは和蘭語を通して、西洋の学術を研究し始め、後に江戸でもこのような研究が行われた。彼らによって大規模な翻訳活動が展開され、数多くの著作が世に送られ、蘭学は全面的に開花した⁵。分野別にみると、従来明末洋学及び吉利支丹学の影響下にある天文・地理などは勿論のこと、西洋医学・物理学・植物学・化学などの新しい分野も移入されている。『解体新書』（1774）、『暦象新書』（1798）、『気海観瀾』（1825）、『植学啓原』（1834）、『舎密開宗』（1837）などはその代表的なものであり、それらは初期洋学とは性質を異にし、日本人が西洋宣教師の協力を得ず、単独で作業を行っている。訳書活動と平行して、蘭日対訳辞書の編集も行われ、その成果は『波留麻和解』・『訳鍵』、『ズーフ・ハルマ』、『和蘭字彙』に集約されている。

訳語の面においては初期洋学の訳語を受け継ぐものや、中国古典語の転用による造語が少なからず存在するが、蘭学者が独自に考案した訳語がそれらを遙かに上回り、近代訳語の基盤を築き上げた。蘭学訳語の一部は明治訳語及び現代日本語に継承されただけでなく、二十世紀以後の日本語翻訳に伴って、中国に流入し、現代中国語の形成にも大きな影響を与えた。

4. 洋学の再来

初期洋学より百年余りの時を経て、十九世紀初頭西洋宣教師が再び中国に上陸した。1807年馬礼遜（Robert Morrison）の来華を始め、1840年阿片戦争の敗戦による禁教令の撤回を契機に、多くのプロテスタント宣教師が訪れる。後の1895年日清戦争の敗戦まで九十年余りの歳月がいわゆる後期洋学期であり、前期洋学と同様、宣教師たちは中国人知識人の協力を得て、キリスト教の布教及び西洋文明の啓蒙に力を注いだ。各種の定期刊行物・漢訳洋書、英華字典な

どはこの時期の産物であり、近代日中両国語の成立に大きく影響を及ぼした。

初期洋学と同様、後期洋学の漢訳洋書は宣教師の指導の下、中国人の手を借りて完成するという形で行われてきた。この時期の大きな特徴は何より政府主導による洋書翻訳機構の設立が挙げられる。阿片戦争の敗戦は統治階級からの救国富強の「洋務運動」をもたらした。それによって西洋科学書の翻訳及び外国語に精通する人材の育成が急務となり、時勢に応じて北京同文館や上海江南製造局などが生まれた。やがて上海江南製造局は洋書翻訳の中心となり、地理学・天文学・数学など初期洋学の分野以外に、物理学・化学などの新しい分野の著書が数多く出版されている。中でも『博物新編』（1855）、『六合叢談』（1857～1858）、『格物入門』（1868）などの漢訳洋学書が日本に持ち込まれ翻刻されて、科学啓蒙の役割を果たすとともに、訳語の面でも日本語に影響を及ぼしたことが多くの先行研究に指摘されている。しかし、後期洋学より一步先に行われた蘭学では既に多くの訳語が作り上げられていたため、その影響力は限られるものと思われる。漢訳洋学書より明治訳語の成立に大きな影響を与えたのは英華字典である。日本では、近代日本語及び英和辞書の成立における英華字典の役割について、早くから言及され（森岡 1969）、数多くの研究がなされている。

5. 英学の到来

明治維新の幕開け以前に蘭学は既に衰退していた。それに取って代わり、西洋文化を直接英語から吸収するいわゆる英学が台頭し始め、『語厄利亜語林大成』（1814）、『英和对訳袖珍辞書』（1862）を経て、明治維新を境に徐々に地盤を固めてきた。当時において著名な啓蒙家・思想家である福沢諭吉、西周、箕作麟祥などの多くは蘭学から英学への新旧交代の激動期に位置し、経済・法律・哲学など多岐に渡る分野で活躍する。用語の面では蘭学及び漢訳洋書の恩恵を浴びながらも、引き続き大量の訳語が創案され、特に蘭学では見られなかった経済・法律・哲学・社会など人文科学の訳語の発達を特徴として挙げる事ができる。

近代訳語成立の紆余曲折の中、同一の概念或いはものに対し、その訳語が常に幾つも存在する状況が続いてきた。これは当時の基礎教育の普及及び研究に支障をもたらすこととなり、訳語の統一をしようとする機運が次第に高まった。こうした時勢の要請に応じて、数学訳語委員会、化学訳語委員会（1881）物理学訳語会（1883）といった専門別の訳語会が次々と発足した。各委員会によって編纂された訳語集は訳語の混沌とした状況を一掃し、訳語の統一・規範に指針的役割を果たしている。当時において、個人或いは訳語会によって学術用語制定のために編纂された主な訳語集・対訳辞書は『医語類聚』（1872）、『工学字彙』（1886）、『物理学術語^{和英}対訳辞書』（1888）、『化学訳語集』（1891）など20種ほどあり、近代訳語研究にとっては欠く

ことができない資料群である⁶。これらは近代訳語の完成期に位置する。

6. 日本書翻訳の始まり

十九世紀八十年代、日本で訳語統一運動が徐々に進行する中、中国でも宣教師たちによる訳語の統一をめぐる論議が展開されていた。しかし、訳語会の設立などの努力は見られず、結実には至っていない。各分野の訳語は依然として宣教師たちに支配され、訳語の不統一の状況が続いていた。日清戦争敗戦は、中国国内の関心を日本に向け、日本書の翻訳が開始されることとなった。上海で創刊された『時務報』（1896）、『農学报』（1896）を皮切りに数多くの日本書の翻刻本、訳語集、教科書が出版され、それに伴い、大量の日本製訳語が一気に中国に流れ込んだ。日本製訳語は社会科学から自然科学まで広範囲に渡っており、量的にも質的にも宣教師たちのそれを遙かに上回っている。それによって宣教師訳語の独占的局面が打開され、近代中国語は語彙から文体に至るまで大きく変貌した。

日本製訳語の氾濫は既に定訳のある用語と衝突を起こし、政府による迅速な対応が余儀なくされた。しかし、政治の不安定及び財政難などの諸問題を抱える民国政府にとって訳語の統一は容易ではなかった。1910年代に成立した医学名詞審査会、化学訳語委員会、科学名詞統一委員会などによる一連の努力を経て、後の国立編訳館（1933）の創立によって、ようやく解決する。この間、実に二十数年の歳月を費やした。結果的に、同館による『化学命名原則』、『物理学名詞』、『鉱物学名詞』、『化学儀器名詞』などの訳語集では多くの日本製訳語が採用され、宣教師たちによる訳語の殆どが淘汰されることとなった。

7. 近代語研究の現状とその問題点

近代語・近代訳語に関する研究は日中両国において国語学分野のみならず、それぞれの科学分野でも大に行われてきた。本節はその研究史を整理するとともに、その現状及び問題点を検討する。

近代の新漢語について、日本の国語学界では、早くから研究が進められてきた。はじめに、国語の中の漢語問題を取り上げたのは山田孝雄『国語の中に於ける漢語研究』（1940）である。氏は漢語のよって来たところを考察し、その源流として交通輸入・漢学・仏典・洋学の四つのルートを提示している。学術用語について「洋学の翻訳より生じたる漢語」の節で10数種類の蘭学系統の科学書及び漢籍洋書を上げ、言及している。

続いて松村明、森岡健二の洋学資料による日本近代語の研究が挙げられる。特に、森岡氏の

『近代語の成立』(1969)は、近代語成立における英華字典の役割を初めて提起し、後の近代語研究に大いに影響を及ぼした。本書の中で、学術用語(第十二章)について数学、哲学、鉱学訳語などが調査されている。しかし、氏の訳語出自の判別は全体的に英華字典と英和辞書における訳語の有無によるものであり、そのルーツとなる原本を確認していないため、概括的なものとしかれない。これを補うように近代訳語の成立について個別の事例からアプローチするいわゆる「語誌」研究が登場する。広田栄太郎の『近代訳語考』(1969)は蘭学・英華・和英辞書の辞書類を中心に明治期の小説、後期洋学書など多種の資料を駆使しながら、「彼女、恋愛、蜜月、新婚旅行」などの一般用語26語の語誌を綿密に調査し、後の研究に大きな影響を与える。斎藤毅の『明治のことば』(1977)は主に「東洋、西洋、合衆国、社会、哲学」などの成立を解明する緻密な論考であり、調査に用いる資料は広汎で、近代語研究の規範的なものと言える。この系統を受け継いだ研究は鈴木修次(1981)、柳父章(1982)などが挙げられる。「語誌」研究と平行し、近代訳語の成立は英和辞書に登録される時点で、訳語の定着とみなす研究もなされてきた。その代表的なものは惣郷正明・飛田良文の『明治のことば辞典』(1988)である。

森岡氏とほぼ同時に近代語研究に注目したのは杉本つとむである。氏の学説は江戸時代後期の蘭学を中心に展開され、一連の名著を世に送った。氏は英華辞書以外に、蘭学辞書の『和蘭字彙』、『訳鍵』などに注目して、蘭学関係の著書を整理するとともにその訳語の形成も解説している。『江戸時代蘭語学の成立とその展開』、『日本翻訳語史の研究』などの著書では、医学、窮理(物理)、舎密(化学)用語について言及されている。それ以外に蘭学系訳語に言及した人物としては斉藤静香(1967)、湯浅茂雄(1982)、松井利彦(1979、1980、1983)などが挙げられる。

佐藤亨は『近世語彙の歴史的研究』(1980)、『近世語彙の研究』(1983)、『幕末、明治初期の語彙の研究』(1986)などにおいて、前・後期洋学書に焦点を当て、詳細な考察を加えると同時に、日本の近世、近代語彙との影響関係を追及した。それを皮切りに、進藤咲子の『明治時代語の研究』(1981)、松井利彦の『近代漢語辞書の成立とその展開』(1991)、が出ており、日本の訳語の成立に際しての英華字典や漢訳洋書の役割などが解説されている。

それと逆に日本製訳語が中国語に及ぼした影響という視点から出発したのは実藤恵秀である。氏は特に留日学生の翻訳活動に着目し、その内容を明らかにするとともにそれを媒介にして日本製訳語の中国語への浸透、いわゆる日本語からの借用語の時期、経路、規模など幾つかの大きな問題をクローズアップした。氏の研究は開拓的なものであり、後の荒川清秀、沈国威、朱京偉(後述)などの日中近代語彙研究に及ぼす影響が大きい。

一方、中国では日本語語彙の逆流入の現象は日本語の借用問題として捉えられ、早くから社会的な関心を引いてきた。早い段階に幾つもの論議がなされている。本格的に日本語の借用語問題を視野に入れ、検討したのは高名凱、劉正焱の『現代漢語外来詞研究』(1958)である。氏の

研究は題目の通り、中国における外来語研究であり、その中で日本語語源と認められる用語459語を挙げており、それは本書にリストアップされた1126語の三分の一を占める。同時期の王立達「現代漢語中従日語借来的詞彙」(『中国語文』1958)は日本語語源の借用語について論究している。しかし、これらの研究において借用語の認定過程を示す資料はほとんど提示されておらず、恣意的なものが多い。続いて北京師範学院中文系漢語教研室の『五四以来漢語書面言語的変遷和発展』(1959)があり、「日本語借用語の吸収」及び「統語的造語型の生産性の向上」、「造語成分の接辞化傾向」などの問題が論究されている。その中で日中近代訳語成立のプロセス及び日本語借用語の位置づけ等の問題に触れているものの、やはり一語一語の詳細は行われていない。

八十年代中期、『現代漢語外来詞研究』をもとに、『漢語外来詞詞典』が出版された。本書における日本からの借用語数は892まで大幅に増加されたが、語源判別の根拠は依然として記されていない。これに注目し、解答を与えたのは馬西尼(Federico masini)のJournal of Chinese Linguistics (1993)⁷である。氏の研究の取り扱う範囲は1840年阿片戦争から日清戦争までの後期洋学の時期であり、『漢語外来詞詞典』をもとに658語の出自について考察されている。

続いて日中近代訳語交流の史実に注目し、日本語の逆流入を問題にしたのは沈国威『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容』(1994)である。氏は日中語彙交流における英華字典の重要性を新たに強調し、社会言語生活を営むのに必要な一般用語を中心に中国語への逆輸入の時期・媒介・規模を詳しく検討した。しかし、氏自らも述べているように日中近代訳語の大半を占める学術用語の問題に深入りしなかった前著『近代語彙交流史』は、ほんの初歩的な仕事に過ぎず、これを克服したのは医学用語を中心とする論文「中国の近代学術用語の創出と導入」(1996)である。後に氏は文献史、科学史、語彙史を含めた学際的研究を提唱するとともに、『六合叢談』の学際的研究／付語彙索引・影印本文』(1999)、『植学啓蒙と植物学の語彙—近代日中植物学用語の形成と交流』(2000)、『近代啓蒙の足跡—東西文化交流と言語接触：〈智環啓蒙塾課初歩〉の研究』(2002)、『遐邇貫珍の研究』(2004)を次々と公表した。これらの研究は後期洋学書の専門書、教科書、雑誌を対象とし、植物・物理・地理学など幅広い分野の訳語の成立・発展状況に言及したのみならず、各書の中に原本の影印資料が入れられていることは大変有益なことである。しかし、これらはあくまでも一時期の著書が日中語彙交流に果たした役割を重点に置いたため、訳語・学術用語の生成・定着・他言語への影響などの解明には遠く、分野別に体系的に捉える必要が出てくる。

これを補う研究は荒川清秀の『近代日中の学術用語の形成と伝播—地理学用語を中心に—』(1997)と朱京偉の『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門用語を中心に』(2003)である。前者は個別の事例「熱帯、回帰線、海流、貿易風」といった学術用語を例に、日中両国における地理学用語の発生、定着、交流などの問題を大量の資料を用いて詳細に考察

している。後者は日本語借用語の中国への定着に重点を置き、哲学・音楽・植物学分野の学術用語を対象に、特に19世紀末期以降の両国の資料を駆使しながら計量面から日本製訳語の逆流入の規模などを論究している。

8. おわりに

ここまで概観してきたように、近年、近代語研究は日中語彙交流の立場から出発する論著が多く、近代東西言語文化接触研究会⁸という専門学会まで発足し、注目される分野である。中でも近年、学術用語についての研究では、沈国威（1996 医学・2000 植物）荒川清秀（1997 地理）、朱京偉（2003 哲学・音楽・植物学）などの論著が次々に刊行されている。

しかし、これらの先行研究は日中学術用語の交流史乃至日中語彙交流史の全貌を解明するには遠く、未開拓の分野は依然として残されているため、分野別にさらなる発展が必要となるであろうと思われる。中でも特に数学・物理・化学などのような日中同形語の多い理工系の学術用語は専門性が強いいためか、体系的に扱う研究が少なく、化学分野に関しては管見の限りではまだ見られない。

また自然科学を代表する化学は両国の近代化を進める上で最重要視され、力を入れられた分野であるため、各時期においてその著作が多い。

さらに化学は西洋からの伝来の歴史が古く、日中両国の化学訳語の発生、発展は先述した日中言語交渉の五つの時代に跨っており、両国における化学分野の訳語の変遷を追跡することによって、日中語彙交流の全貌を見ることができる。

化学用語に限らず、一つの分野の訳語の形成から定着（或いは淘汰）の過程を究明するには、当該分野の導入から成立までの間における代表的な文献を通時的に調査していくことが近代語研究の基本的立場である。特に、日中語彙交流史の立場から出発した本研究は両国におけるこのような作業のみならず、同時代の訳語を共時的に考察することも要求される、詳論を待ちたい。

▲本稿は“教育部人文社会科学研究09JYC740014項目”の助成により、完成されたもので謹んで感謝を申し上げます。

(注)

- 1 山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』P5～8を参照。
- 2 時期区分、書目の詳細に関しては、佐藤亨（1986）『幕末・明治初期語彙の研究』P17～19、荒川清秀（1997）『近代日中学術用語の形成と伝播—地理学用語を中心に』P22～27頁、沈国威（1998）「新漢語に関する思考」P37～61、陳力衛（2001）P270～275。

- 3 『物理小識』の訳語を取り上げる論文は杉本つとむ（1991）がある。
- 4 吉利支丹学を専門に扱う著書は海老澤有道『南蛮学統の研究』『同・増補』がある。更に杉本つとむ（1983）には切支丹学は存在しないという論説も見られる。
- 5 杉本つとむ『日本翻訳語史の研究』（1983）、『江戸時代蘭語学の成立とその展開』に詳しい。
- 6 『日本科学技術史大系』（第一巻通史）「学術用語の統一」を参照。
- 7 後に香港中国語文学会審訂を経て『現代漢語詞彙的形成—十九世紀漢語外来詞研究』のタイトルで1997年に刊行される。
- 8 近代東西言語文化接触研究会は関西大学教授内田慶市・沈国威などにより発足し、十六世紀以来の西洋文明の東漸とそれに伴う文化・言語の接触に関する研究を主旨としている。

参考文献

- 荒川清秀（1997）『近代日中学術用語の形成と伝播—地理学用語を中心に』白帝社
- 海老沢有道（1978）『南蛮学統の研究増補版』創文社
- 王国維（1905）『論新学語之輸入』『教育世界』第96号
- 斎藤静（1967）『日本語に及ぼしたオランダ語の影響』篠崎書林
- さねとうけいしゅう（1970）『中国人日本留学史・増補』くろしお出版社
- 朱京偉（2003）『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門語を中心に』白帝社
- 沈国威（1994）『近代日中語彙交流史』笠間書院
- （1998）『新漢語研究に関する思考』『文林』32号
- 杉本つとむ（1977）『江戸時代蘭語学の成立とその展開 I～V』早稲田大学出版部
- 中山茂（1992）『近代西洋科学用語の中日貸借対照表』『科学史研究II』第31号
- 馬西尼（1997）『現代漢語詞彙的形成—十九世紀漢語外来詞研究』漢語大詞典出版社
- 森岡健二（1969）『近代語の成立明治期語彙編』明治書院
- 山田孝雄（1958）『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館